

## 医学における絶滅危惧種

### Endangered species in medicine

金沢大学がん研究所分子生体応答研究分野

向 田 直 史

18世紀には北米大陸東岸に50億羽以上生息していたリョコウバトは、食用や羽毛の採取を目的とした乱獲によって、200年も経たない1914年に動物園で飼育されていた最後の個体が死亡し、絶滅に至っている。このことは、どのような種であっても、繁殖可能な個体数が一定以下になると、種としての再生が困難となり、最終的には絶滅に至ることを例示している。

現在盛んに叫ばれている医療危機の一面として、産科・小児科などの診療科における医師不足がある。このような事態が続くことは、専門医を養成するのに不可欠な指導医予備群の枯渇を生じ、動物の種で言えば繁殖可能な個体の消失と言う状態になる危険がある。しかし、この問題はマスコミにも取り上げられるようになり、これらの専門医の枯渇が一般社会にとって大きな不利益をもたらすという認識が、社会全体に共有されつつある。したがって、医学界と一般社会が手を携えて、適切な対策を取ることで、これらの専門医集団が絶滅危惧種のリストから外れる可能性は大きいと考えられる。

マスコミを始めとする一般社会のみならず、医学界全般においても、ほとんど興味をもたれぬまま、日本の医学界で絶滅危惧種になっているのは、physician-scientistという、科学研究の経験があり、科学研究の成果の理解に立って、臨床研究・診療を行う専門医の集団であろう。

Harrisonの内科書の17版の1ページ目では、1950年の初版発行以来の科学技術の進歩が医療の実践に大きな影響を与えたことが記述されるとともに、科学知識に基づく技術・論理が、臨床の問題の解決の基盤であるという理念が謳われている。この理念は、新しい診断・治療法を開発するために行う臨床治験や実験的探索医療には、科学研究の遂行能力のあるphysician-scientistが必要不可欠であるという認識に繋がっている。このような認識に立って、アメリカ医学界は、physician-scientistの養成のためにMD-PhDコースを開設し、physician-scientistの学会としてAmerican Society for Clinical Investigationを持ち、雑誌としてJournal of Clinical Investigationを刊行している。さらに、近年National Institutes of Healthなどは、physician-scientistを目指す若手研究者への手厚い研究助成が行なうなど、physician-scientistの育成に国家レベルで取り組んでいる。

米国の医学界のphysician-scientistの養成への熱心な取り組みの背景には、米国の医師の養成システムがあげられよう。周知の通り、米国のmedical schoolは、4年制大学、しかも多くの場合理科学部卒の卒業生を受入れ、医師として養成している。さらに、medical schoolに入学するために必要な推薦状を得るために、medical schoolを目指す大学生の多くは大学の研究室などで長期に渡り研究補助などに携わっている。したがって、

米国の医師の大半は、何らかの科学研究に携わった経験を持っていて、Harrisonの教科書で謳われている「科学としての臨床医学」を実体験として理解していると考えられる。

翻って日本の現状を見ると、医学生の大半は、科学実験の経験も少ないまま、高校から直接進学している。しかも、医学部在籍中には基礎配属などの名称で行われている研究室での短期の経験だけで、ほとんど科学研究をせずに卒業している。このような現状を反映してだろうか、日本の臨床医学の指導的な立場にある人達によって編集されている内科学の教科書の序論を読んでみると、「Artとしての医療」の側面のみを強調している教科書が多いことに気づく。このことは、「根本にある精神を究めるかわりに最新の成果さえ受け取れば十分と考えている」とベルツ博士が批判していた、明治期の日本人の科学に対する受容様式が、平成に入っても色濃く残っていることを示していると言えよう。

「科学としての臨床医学」の理念の徹底が不十分なまま、特定の手技の施術数などが必要条件として前面に掲げられている専門医制度のもと、「Artとしての医療」が過剰に重視されつつあるのではないかと基礎医学研究者として危惧している。日常診療への導入が提唱されているEvidence-based medicine (EBM)では、医学論文を科学的に評価する能力が求められている。このような能力は、自分で研究を行い、論文を纏め、論文の論理の組み立てを知ることを通して、初めて得られる。したがって、専門医としてEBMに基づく日常診療を行うには、研究を通じた科学的手法の習得は欠かせないであろう。

ベンチからベッドサイドへの掛け声のもと、現在求められている新しい診断・治療法の開発には、トランスレーショナル・リサーチを遂行出来る、研究能力のあるphysician-scientistを拡大再生産しなければならないであろう。国際的な研究者の育成を目的としている、日本学術振興会による若手研究者インターナショナルトレーニングプログラムの医学分野で採択された事業は、がん研究所・医学系研究科が共同で提案した「がんの診断・治療法の開発を担う医科学研究者の育成」を含め、physician-scientistの育成を謳っているものだけである。このことは、physician-scientistの育成の重要性に遅ればせながら、わが国政府も気づき始めたことを示していると言えよう。

「わが国ベスト10大学」を目指している金沢大学の医学系研究科においては、若手研究者インターナショナルトレーニングプログラムなどを活用し、基礎医学・臨床医学の講座の垣根を越えた連携の下で、physician-scientistが絶滅危惧種のリストから外れるように尽力し、トランスレーショナル・リサーチを盛んにする必要があるのではないだろうか。